

読書への誘い^{いざな}

河合文化教育研究所 所長 木村 敏

本を読むということには、どんな意味があるのだろうか。それは私たちの心に何をもたらすのだろうか。

たくさん本を読めば確かに知識は増える。また本を読むことによって今まで知らなかった未知の世界を垣間見することもできる。それはもちろん望ましいことだろう。しかし現在のネット社会の時代には、知識も瞬間的な体験もネットから手軽に得ることができるともいえる。だが、そこから得ることができるような断片的な知識や表層の経験をどれだけ数多く寄せ集めても、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。

教養とは、私たちの心を深く耕すもののことである。ひとまずこう言ってもいいだろう。それを通して、幅広い視野や洞察力、深い思考力が生まれ、そこから私たちは世界を見る目を養うと同時に、また「自分とは何か」、「生きることとは何か」といった根源的な問題を考えることができるようになる。そうすると、この世界のうちに自分一人では存在することができないこと、自分が自分であるためには必ず他者の存在が必要になってくることもわかってくる。生きるとは、世界のうちで、互いに傷つきやすく脆い身体をかかえながら、他者と支えあい交流しながらともに存在することである。その自覚のなかから、他者に対する想像力も生まれてくる。そのことが私たちの心をいっそう豊かなものにしていくのである。

では、教養を自分の中で培うには、つまり心を耕すにはどうしたらよいのだろうか。それは、良い本を読むことである。良い本とは、ある時代のある場所に生きた書き手が、彼が生きた時代の矛盾に向き合い格闘し、苦しみ考えながら自己の内的必然性に促されるようにして書いた本のことだと言ってもいいだろう。そうして書かれた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にか書き手が生きている、その人だけの世界に入り込むことになる。本の書き手の生きているこうした世界こそが、一つひとつの知識や情報を、目に見えないかたちで背後からつなぎ、読む者の心に奥行きを与えてくれるような意味を発酵するのである。

ある人が歳月をかけてつくりあげたその人だけの世界に、時間をかけて持続的に住み着き、彼の体験や思考をその内側から自分の中に取り入れるということになると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界を深く体験することで、読者の心は豊かになり、さまざまな感性が磨かれていく。こうしたことのすべてを教養だといってもいいかもしれない。そしてその教養はまた、この社会の矛盾がどこから生まれてくるか、その社会と自分との関係についての認識をも促し、同時に、遠くで困窮の中にいる見えざる他者へのまなざしをも深くする。それは、この社会の矛盾への批判精神を養うとともに、振り返ってその中での自分の位置とありようを対象化し、他者とていねいに向き合おうとさせる。

こうした意味での教養の培養を願って、若いみなさんの心に届けたいと願って作られたのが河合文化教育研究所の本冊子『わたしが選んだこの一冊』である。2010年の創刊からこれまで10年間にわたって発刊し、その総計は65万部を超えることになった。多くの若い読者に支えられてきたお蔭である。2017年版までは、河合文化教育研究所の主任研究員や河合塾の講師たちが、自分の人生の中で深い影響を受けた特別な本を選び出し、短いながら熱い思いを込めて諸君に向けて書き綴ってきたものを編集して作ってきた。

2018年版からは、従来のその形の枠を拡げて、河合文化教育研究所のシンポジウムや研究会、講演会、出版などに私たちと同じ志と問題意識をもって関わっていただいた外部の方々にも依頼して、その人たちの特別な一冊について書いていただくことになった。お蔭様で、多くの執筆者の方々から心のこもった刺激的な原稿をお寄せいただくことができた。この場を借りてお礼申し上げたい。

ある時代にのつぎぎならない思いを込めて書かれた著者の本を、別の時代に読んで心を動かされた推薦者が、新しい時代に生きる若い人にさらにその本を手渡していく。そうしたいわば「教養」のリレーを果たそうとしたのが、『わたしが選んだこの一冊』である。そのリレーが、このような形でつながり広がってきたことを喜ぶたい。

教養は受験には直接の役に立たないと思われるかもしれない。しかし教養は手持ちの知識を有機的につないで、知識の量よりもその質を高め、そして諸君の世界に対する認識力を掘り起こし、ひいては思考をも強靱に鍛えてくれる。それは深いところで、諸君を大きく変え、受験という人生の関門を突破していく力をもつけてくれる。

塾生の諸君に良質の読書をお勧めするのは、まさにそのためである。

もくじ

読書への誘い ^{いざな}	1
-----------------------------	---

《推薦図書》	《推薦者》
『資本主義と闘った男 宇沢弘文と経済学の世界』 佐々木 実 著	天野哲彦 4
『食を料理する 哲学的考察』 松永澄夫 著	伊東俊彦 5
『フェルマーの最終定理』 サイモン・シン 著 青木 薫 訳	乾 雅博 6
『善悪の彼岸／道徳の系譜』 フリードリッヒ・ニーチェ 著 信太正三 訳	伊吹浩一 7
『後藤新平 日本の羅針盤となった男』 山岡淳一郎 著	色平哲郎 8
『私の憲法体験』 日高六郎 著	鵜飼 哲 9
『抵抗者たち 反ナチス運動の記録』 池田浩士 著	岡 真理 10
『企業家としての国家 イノベーション力で官は民に劣るという神話』 マリアナ・マッツカート 著 大村昭人 訳	金子 勝 11
『石原吉郎詩文集』 石原吉郎 著 佐々木幹郎 解説	川本隆史 12
『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』 レオナルド・ダ・ヴィンチ 著 杉浦明平 訳	河本英夫 13
『市民の日本語 NPOの可能性とコミュニケーション』 加藤哲夫 著	木村直恵 14
『ゲシュタルトクライス 知覚と運動の人間学』 ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカー 著 木村 敏・濱中淑彦 訳	木村 敏 15
『アメリカ・インディアン悲史』 藤永 茂 著	小出裕章 16
『日本とアジア』 竹内 好 著	古賀 暹 17
『数学の大統一に挑む』 エドワード・フレンケル 著 青木 薫 訳	小林一路 18
『新增補版 心の傷を癒すということ 大災害と心のケア』 安 克昌 著	斎藤 環 19
『自発的隷従論』 エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ 著 山上浩嗣 訳	齋藤俊明 20
『オン・ザ・マップ 地図と人類の物語』 サイモン・ガーフィールド 著 黒川由美 訳	佐藤裕治 21
『資本主義の終焉と歴史の危機』 水野和夫 著	白川真澄 22
『谷川俊太郎詩集』 谷川俊太郎 著	立岩真也 23
『科学者が人間であること』 中村桂子 著	内藤 酬 24
『戦後史の正体 1945-2012』 孫崎 亨 著	内藤 耕 25
『山里に描き暮らす』 渡辺隆次 著	中村勝己 26
『安吾のいる風景／敗荷落日』 石川 淳 著	野家啓一 27
『大菩薩峠』 中里介山 著	野口良平 28
『この世界の片隅に』 こうの史代 著	畑中小百合 29
『魂と弦』 イヴリー・ギトリス 著 今井田 博 訳	幅 至 30
『民主主義の本質と価値 他一篇』 ハンス・ケルゼン 著 長尾龍一・植田俊太郎 訳	樋口陽一 31
『大地と星輝く天の子』 小田 実 著	玄 順恵 32
『吉本隆明詩集』 吉本隆明 著	平田 匠 33
『ご冗談でしょう、ファインマンさん』 リチャード・フィリップス・ファインマン 著 大貫昌子 訳	宮元健輔 34
『生命とは何か 物理的にみた生細胞』 エルヴィン・シュレーディンガー 著 岡 小天・鎮目恭夫 訳	森永和英 35
『科学革命の構造』 トーマス・クーン 著 中山 茂 訳	米本昌平 36
『家郷の訓』 宮本常一 著	渡辺京二 37
バックナンバー	38

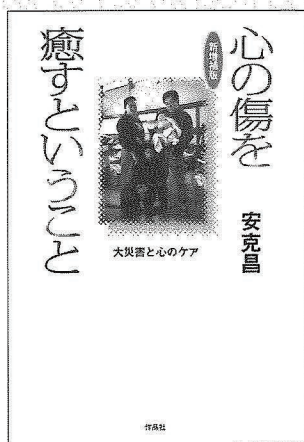
河合文化教育研究所

河合文化教育研究所の歩み 44

主任研究員 45

出版 河合ブックレット・単行本 47

主任研究員の著書から大学入試問題が^が出題！・研究会紹介 52



新增補版 心の傷を癒すということ

大災害と心のケア

あん かつまさ
安 克昌 著

作品社 [定価: 本体2,200円+税]

推薦 斎藤 環 (さいとう・たまき)

1961年、岩手県生まれ。1990年、筑波大学医学専門学群環境生態学卒業。
医学博士。爽風会佐々木病院精神科診療部長（1987年より勤務）を経て、2013年より筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。
著書：『文脈病』（青土社）、『社会的ひきこもり』（PHP 研究所）、「生き延びるためのラカン」（バジリコ）、『世界が土曜の夜の夢なら』（角川書店）、『オープンダイアログとは何か』（医学書院）
監訳書：ヤーコ・セックラほか著『開かれた対話と未来』（医学書院）など。

一九九五年一月十七日の早朝、兵庫県南部をマグニチュード七・三の地震が襲った。神戸市市街地に甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災である。犠牲者は六四三四人に達し、東日本大震災が起きるまでは戦後最悪の被害規模だった。

この震災後、社会的にもさまざまな変化が起きた。人々の防災意識も、被災地支援や報道のあり方についても。精神医学的には、被災体験が深刻な心の傷（トラウマ）をもたらす事実が広く知られるようになり、これ以降、大きな災害が起これると被災地にこころのケアチームが派遣されるのが当たり前になった。その意味である震災は、わが国におけるこころのケア元年をもたらしたのである。

著者の安克昌は、神戸大学附属病院精神科の医局長として、自らも被災しながら被災者の救護活動に奔走した。本書は著者が激務のかたわら、一年間にわたって産経新聞に連載したエッセイをまとめたものである。あの震災に当事者として関わった精神科医が、現場から発信したほぼ唯一の記録でもある。安の師である中井久夫は、震災直後と一年後に『1995年1月・神戸——「阪神大震災」下の精神科医たち』と『昨日のごとく——災厄の年の記録』（ともにみすず書房）を出版しているが、中井はいずれも「間接情報」であり本書には及ばない、と謙遜している。

安は被災地で、全国から続々と集まってくる精神科医のコーディネートをを行い、救護所や避難所にあつてはアウトリーチによる診療やカウンセリングに関わった。今でこそ当たり前になされている避難所訪問型の診療スタイルを創始したのは彼である。震災後、安の関心はトラウマと深く関係する「解離」へと向かい、いくつもの先進的な業績を残しつつあった。しかし、その才能がまさに開花を迎えようとしていた折も折、安は肝臓がんに斃れる。享年三十九歳。その死を悼む声は今も止むことがない。

トラウマ治療やこころのケアが当たり前になった現在、本書の内容にはさほど新鮮味はないかもしれない。しかし本書が二十五年前、それも現場に軸足を置きつつ書かれたことを考えるなら、むしろ著者の先見の明に驚かされる。本書の結びにある言葉を引こう。「世界は心的外傷に満ちている。“心の傷を癒やすということ”は、精神医学や心理学に任せてすむことではない。それは社会のあり方として、今を生きる私たち全員に問われていることなのである」。このくだりなど、トラウマ臨床で近年注目されている「トラウマ・インフォームド・ケア」を予見していたかのようだ。

トラウマの治療には独特の難しさがある。理論だけでは扱えない。手ぶらで挑めば巻き込まれる。寄り添いながらも巻き込まれすぎず、理論を意識しつつも臨機応変に対応する柔軟さが求められるのだ。そのためには治療者の品格が重要になるが、それにもまして「社会の品格」が問われるという安の指摘は、今なお未達成の課題として私たちの目の前にある。

この増補版には、安のトラウマに関する論文やエッセイ、安の知己だった精神科医のエッセイや中井久夫の哀切極まりない追悼文、後述するドラマ制作に関わった人々の文章が加わり、夭逝の人・安克昌の人となりを知る意味でも充実した内容になっている。

サントリー学芸賞を受賞した本書は、出版から四半世紀を経て、NHK土曜ドラマ「心の傷を癒やすということ」として放映された。制作スタッフの「安克昌さんに会いたい」という思いは、丹念な取材と品位ある脚本、繊細な演出と演技によってドラマ史に残る傑作が生まれた。安克昌役を演じた柄本祐による「（心のケアとは）誰も一人ぼっちにさせへん、てことや」というセリフは、実は本書中にはない。脚本家の桑原亮子による創作だ。彼女が「安さんが書かせてくださった」と述べているように、本書のエッセンスが凝縮された至言と言えるだろう。